

一八八五年十月三十一日(土)

シャームプクルの家で——ハリバツラブ、ナレンドラ、ミスラなどの信者たちと共に

バララーム氏のためを思う——いとこ従兄のハリバツラブ・ボース

聖ラーマクリシュナは病氣治療のため、シャームプクルの家に信者たちと住んでいらつしやる。今日は土曜日。アツシン黒分八日目。カルティク月十六日。西曆一八八五年十月三十一日、午前九時。

此処に信者たちは昼も夜も詰めかけている——タクルの看病のために！ しかしまだ、俗世を捨てた人はいない。

バララーム家は家族こそつてタクルを信じ、お仕えしている。彼の家は、先祖代々信仰家の血筋である。父親はある年配に達すると、独りでプリンダーヴァンに住むようになった——大聖シャーマスンダラ(クリシュナ)を祀ったお堂を建立し、そこにいとこいるのである。彼のいとこ従兄、ハリバツラブ・ボースはじめ、ほかの家族もみなヴィシユヌ派だ。

ハリバツラブはカタツク(オリッサ州)の首席弁護士である。バラマハンサデーブ大覚者様のところにバララームが出入

りして——ことに家族の婦人たちもいっしょにいるのを聞いて、それが気に入らないのである。『まあ、お会いしてごらん』とバララームは言っていた。——『あんた、あの方に一度会ってごらん。そうしてから何でも言いなさい!』というわけで、ハリバツラブは今日、ここに来たのである。彼はタクールに会って、大へん尊敬した態度であいさつをした。

聖ラーマクリシュナ「どうしたらよくなるかなあ!——あんたさんも、これはヒドイ病気だと思ukai?」

ハリバツラブ「は、それは医者たちが申し上げることでございましょう」

聖ラーマクリシュナ「女たちもわたしの足からチリをとっていく。きつと、わたしの中にあの御方イシラ(神)がいなさると思ってるんだらう——わたしや、そう思ってる見ている」

ハリバツラブ「あなた様はサードウでいらつしやいます! 皆があなた様にごあいさついたしましたし、それが当然でございましょう?」

聖ラーマクリシュナ「そりや、ドウルヴァとか、プラフラーダとか、ナーラダ、カピラのようなサードウならいいさ、わたしなんか……。あんたさん、また来て下さいよ」

ハリバツラブ「はあ、私どもは引きよせられて参ります。あなた様がおっしゃいませんでも……」

ハリバツラブは帰るにあたって、あいさつをするのにタクールの足のチリをいただこうとする。タクールは足を隠して、そうさせまいとなさる。しかしハリバツラブをよけることはできなくて、彼は無理矢理お足のチリをいただいた。

ハリバツラブは立ち上がった。タクールは彼に敬意を表して、やはりお立ちになった。そして、こ
うおっしゃる——「バララムがっかりしているから、わたしも彼の家に行こうとは思っているん
だが——。行って、あんたたちに会おうと——。でも、ちょっと気になるんだよ！ あんたらがバララ
ムに、『この人を招^よんだのは誰だ?』と言わないかと思って——」

ハリバツラブ「そんなこと、誰が申しますものですか。そんなお気づかいは全く無用なことでござ
います」

ハリバツラブは帰った。

聖ラーマクリシュナ「(校長に)——信仰のある人だ。そうでなけりゃ、どうして無理矢理足のチリ
をとっていくなんてことをする?

あのこと、お前さんに言ったね——『半三昧のとき、医者ともう一人の人を見た』と。あれがその
人だよ。だから来たんだよ」(訳註——一八八五年十月二十九日参照)

校長「さようでございますか。たしかにあの人は信道家です」

聖ラーマクリシュナ「正直な人だね！」

タクールの病状報告のため、校長はシャンカリトラのサルカル医師の家に行った。医師は今日もま
た、タクールの診察に来るだろう。

医師は、タクールとマヒマーチャランのことを話した。

医師「ねえ、あの方(マヒマーチャラン)はあの本を持ってきて下さるんですよ——私に見せてくれ

るといつておられた本を！ 催促したら、すっかり忘れていたんだそうです。そういうこともあるでしょうよ。私だってよく物忘れをするから——」

校長「あの方は博識ですねえ」

医師「それなのに、あの状態とは！」

タクールに関して、医師はこう言った——「ただ信仰をもっているだけではどうしようもないでしょう—— 智識がなかったら」

校長「どうしてですか？ タクールはこうおっしゃいましたよ。智識のあとでホントの信仰だって……。しかし、あの方のおっしゃる智識、信仰と、あなた方の考えておられる智識、信仰とはずいぶん違いますかね。

あの方が、『智識の後、信仰だ』とおっしゃる意味は、真理の智識を得たあとの信仰、ブラフマンを覚ったあとの信仰——至聖かみを知ったあとと信仰を持つ、ということですよ。あなた方の言われる智識は、Sense、Knowledge——つまり、五官の感覚(Sense)を通して得られる知識(Knowledge)のことですからね。前者(真理の智識)は not verifiable by our standard——ふつうの感覚を通して得た知識からでは正しく理解できないのです。でも後者(五官の感覚を通して得た知識)は、verifiable——立証出来ます」

医師はそれには答えず、アヴァターラに関する話を始めた。

医師「それから、アヴァターラだの何だのと、どういうことですか？ 足のチリをとったりして！」

校長「なぜでしょう、あなただっておっしゃったではありませんか。——臨床試験中に神の創造を

見て恍惚とする——人間のことをよく観察するとうつとりしてしまふと。それなら、なぜ神に頭を上げてはいけないのですか。人間の胸のなかに神はいますのですから——。

ヒンドゥー教では、あらゆるものにナーラーヤナ(神)を見ます！このことについて、あなたはあまりご存じではないと思いますね。あらゆるものに神が宿っておられるのなら、あの方を拜んでも不思議はないでしょう？

大覚者様はおつしやいました——『或るものには、他のものより余計にあの御方が顕れている——太陽光線が他のものより水と鏡によく反射するように。水分はどこにでもあるが、川や池、湖に集まって顕れている』と。我々は神に合掌するのであつて、人間の肉体にはありません。God is God — not man is God. (神が神なのです。人が神なのではありません)。

あの御方はリーズニング(一般的思考法)で理解出来はしない。——すべては信にかかっている。タクールはそうおつしやるのです」

今日、医師は校長に著書——Physiological Basis of Psychology『心理学における生理上の基礎』を一冊贈ってくれた。——はじめの頁に、as a token of brotherly regards.「親愛をこめて尊敬のしるしとして」と書いて——。

聖ラーマクリシュナとイエス・キリスト——聖ラーマクリシュナにキリストの顕現

タクールは信者たちと坐つていらつしやる。午前十一時。ミスラという名のキリスト教徒と話をし

人の別荘で、この方は高くしたお席に坐つておいででした。床の上にもう一人坐つておられて——その方はさほど Advanced (靈格の高い方) ではありませんでした。

この国には四人の神の門番がいらつしやる。ボンベイ地方にトゥカラム。カシミールにロバート・マイケル。ここベンガルにはこの方。——それからもつと東に、もう一人いらつしやいます「訳註、トゥカラム——キールタンをしながら信仰バクティを広めた十七世紀の詩人」

聖ラーマクリシュナ「あんた、何か(靈的に)見えるのかい？」

ミスラ「はい。家にいた時分から、よく光が見えたものです。その後、イエスにお会いしました。そのお姿といつたら！——あの美しさに比べたら女の美しさなんか！」

しばらくするとミスラは、信者たちと話をしながら上着をぬいで、なかに着ている黄土色ゲルアの下衣を見せた。(訳註——黄土色ゲルアの下衣を見せることで、自分が全てを放棄していることを表したものと思われる)

タクールはベランダからこちらに來られておつしやる——「この方が、英雄のような姿で立っているのを見たよ」

こうおつしやつて、タクールは三昧にお入りになった。西を向いて、立つたままの三昧である。少し解けると、ミスラを眺めながら笑つていらつしやる。

まだお立ちになったままで。恍惚こうつとしてミスラの手をにぎり、笑つておられる。そして、「あんたの求めているものは、きつと手に入るよ」とおつしやつた。

タクールはイエスの精神状態になられたのだ！ この御方とイエスは同一人物なのか？

ミスラ「（息を吐いて）——私はその日以来、心も命も肉体も、すべてあなた様に捧げております！」
タクールはまた、恍惚こうこつとしてお笑いになった。

タクールは座にお着きになった。ミスラは信者たちに、自分の過去の経歴をみんな話してきかせた。結婚式の日に天蓋が落下してきて、二人の兄弟が死んだときの様子も話した。

聖ラーマクリシュナはミスラをもてなすようにと、信者たちにおっしゃった。

「ナレンドラ、サルカル医師たちと楽しいキールタン」

サルカル医師が来た。医師を見るとタクールはまた三昧さんまいになられた。すこし解けるとタクールは、恍惚こうこつとした様子でおっしゃる——「神カールナーナンダに酔カールナーナンダつたあとサッチダーナンダ、原因カールナーナンダの原因カールナーナンダ！」

医師「はい！」

聖ラーマクリシュナ「無意識じゃないよ」

医師は、タクールが神に陶醉されたのだと理解したらしい。それでこう答えた。——「いえ、あなたは実に意識がハッキリしていますよ！」

タクールはニッコリ笑って、歌の文句を口ずさまれた。

私はこの世の酒は飲まない

クジャ・チャー・カリーに榮えあれと
言つて飲むは

永遠にして至福の甘露酒うまさけ

永遠のよるこびに酔う私を見て

人はただの酔っ払いだと思ふ

わが師より賜たまつた教えに

わが情熱を注いで醸かもした智の酒を

燃える壺より飲んで

わが心 しとど酔いたり

根本真言ムラマシトウなるカーリーの御名を

唱うれば身も心も清浄なり

神の甘露酒さけ飲みて 生命いのちの

四つの実を獲とれとブラサード歌いぬ

四つの実——正義ダルマ、富アルタ、愛情カーマ、解脱モクシヤ

この歌をきいて、医師はほとんど前三昧状態にまでなつてしまつた。タクールもまた、一段と深い法悦境に入られたようだ。そして医師のひざに足をおのせになつた。

少したつて意識が平常に戻ると、タクールは足を医師のひざから引つこめてこうおつしやつた——「ウホ！ あんたは何てすごいことを言つたんだらう！ ああ御方のヒザに抱かれていますんだから、あの御方に病氣のことを言わないで、誰に言えはいんだらう。——頼まなけりやいけないなら、

あの御方に頼もう！」

こうおっしゃると、タクルの両眼からは涙があふれ出した。

再び前三昧に！ その状態で医師におっしゃる——「あんたはとても純粹だ。さもなけりや、足をのつけることはできないんだよ！」

それから——「ラーマの甘露を味わった人だけの心の平安——世間のことが何だ？ 中に何があ
るんだ？ 金、名譽、五官の欲び——この中に何があるんだ？ ラーマを知らずして、どうして自
分を知ることが出来ようか？」

ひどい病気なのに、絶えず靈的興奮をされるタクルを見て、信者たちは心配でたまらない。タクル
ルはおっしゃる——「あの歌を誰か歌ってくれたら、もう静かにしているよ——ハリあまいの甘露あまいの酒あまいを」
別の部屋にいたナレンドラが呼ばれて、神々しい声でこの歌をうたった。

ハリの甘露あまいの酒飲みて、わが心よ、酔いしれよ

地べたを転げまわりながら、ハリ、ハリと呼んで泣くんだよ

ハリの名の大なるひびき、天にとどろかせ

ハリの名となえて、両手あげて踊れよ

ハリの名、すべての人に分かち与えよ

日も夜も、ハリの甘き愛の喜びの海で泳げよ

ハリの名うたえば、高き望みは叶い、低き欲は滅ぶよ！

聖ラーマクリシユナ「それから、あれは？
超越意識の海に愛の波起こりて」
ナレンドラは歌った――

超越意識の海に愛の波起こりて
大なる欲び 甘露したたる遊戯の
美しさ 譬えんかたなし

いと深き禪定に 全ては一つとなりて
時間と空間の隔差は あとかたもなく消え去りぬ
今ここに 喜び勇みて 両の手を高くかかげて
わが心よ いざ唱え ハリ、ハリと称えて

◇ ◇
きよらかな聖なるハリを
わがこころ 想いこがれぬ

第10章 ハリバツラブ、ナレンドラ、ミスラたちと共に

その光 くらぶるもなく
その相 すがたいと麗うるわしく
信者まめひとの胸 よろこばす

新しき この無上の愛に
百万の月 色も褪あせたり
ああ かの光 電光いなづまとひらめき
身もこころも 震えおののく

かの君の 蓮の御足を
わが胸に しかと抱いだきぬ
安らげく 愛のまなざし
なつかしく やさしきものよ

大霊かみの甘露の水に
信愛しんあいの衣ころもまといて
いざ浸れ

永遠のよろこび

医師は集中して聞いていた。歌が終わると、「ク超越意識チダールナシダの海に フレーマーナシダ愛の波起こりて、これは、いいですねえ！」と言った。医師が喜んでいるのを見て、タクールはおっしゃる——「息子が父親に言った。お父さん、ちょっと（酒を）味わってみて、それでも、『飲むのはやめろ』と言うのなら、私は飲まずにおりましょう。すると父親は一口飲んでこう言ったとき——『お前が飲むのをやめるのは一向にかまわないよ。でも、ワシはやめることは出来ないよ』（医師や皆笑う）

——つい先だって、大実母マが二人の人を見せて下すった。医者はそのうちの一人だよ。とてもいっぱい智識が詰まっていたが——みんなカラカラに乾いていた。（医師に向かつて）ハッハッハ、でもいずれそのうち、うるおいがでてくるさ」

医師は沈黙していた。